

第 5 回太平洋諸島大学研究ネットワーク会議 (The 5th PIURN Conference) に参加して

高橋 麻奈

(神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部)¹

1. はじめに

2023 年 7 月 4 月～6 日、クック諸島・ラロトンガ島にて、The 5th PIURN (Pacific Islands Universities Research Network) Conference (第 5 回太平洋諸島大学研究ネットワーク国際会議、以下第 5 回会議) が開催された。PIURN (Pacific Islands Universities Research Network)とは、2013 年に設立された太平洋諸島地域にある大学によるコンソーシアムで、現在 8 つの国と地域にある 15 の大学で構成されている。その目的は、太平洋諸島地域が直面する諸課題に対して大学間での合意形成を促進し、そのための協力・協働体制を構築すること、また地域内の研究者および学生たちへの教育や研究の機会の提供および学術交流を通して、太平洋諸島地域における学術・研究の発展に寄与することである (PIURN)。

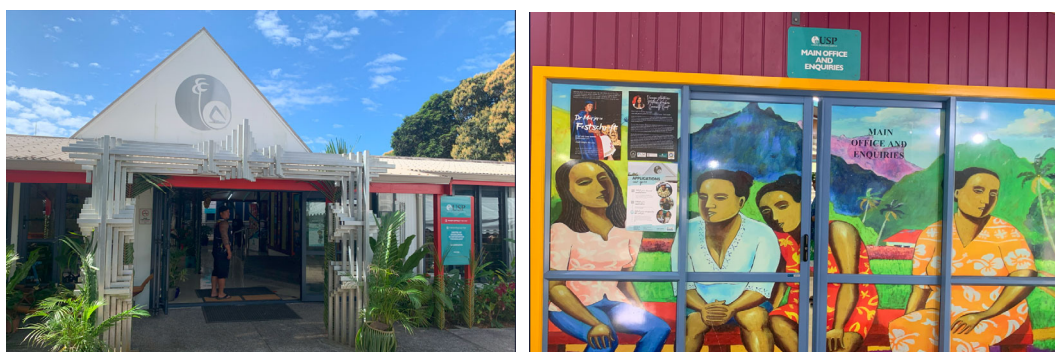


図 1 : 南太平洋大学クック諸島キャンパス (筆者撮影)

PIURN では、2014 年以降隔年で国際会議を開催²しており、第 5 回会議は南太平洋大学クック諸島キャンパス (The University of South Pacific, Cook Islands campus) がホスト大学となって開催された。第 5 回会議のメインテーマは「Exploring this Sea of Islands」であり、太平洋諸島地域を研究テーマとする研究者たちが、世界中から一堂に会した。プログラムは特別セッションと 150 を超える個別報告、パネルディスカッションおよ

¹ takahashi-mana@kanda.kuis.ac.jp

² 2014 年はニューカレドニア大学、2016 年はサモア国立大学、2018 年は仏領ポリネシア大学、2021 年 (COVID-19 のパンデミックにより 1 年延期・オンライン開催) はソロモン諸島国立大学がホスト大学であった。

びアーティストトークなどで構成され、300人以上が参加した PIURN 史上最大規模の国際会議となった。筆者は、唯一の日本人参加者として研究発表を行った。本稿は、筆者による第5回会議への参加の記録である。

2. The 5th PIURN Conference について

2-1. ポリネシア文化の中でのオープニングセレモニー

会議初日のオープニングセレモニーでは、クック諸島前首相で現在太平洋諸島フォーラム (PIF) 事務総長のヘンリー・プナ (Henry Puna) 氏、マーク・ブラウン (Mark Brown) 現クック諸島首相による開会の辞があった。クック諸島の政治の中心を担ってきた二人が、現在は地域全体のガバナンスを担う存在となっていることを想起させ、改めて現代の太平洋諸島地域全体においてクック諸島の存在感が増していることを感じさせる瞬間であった。

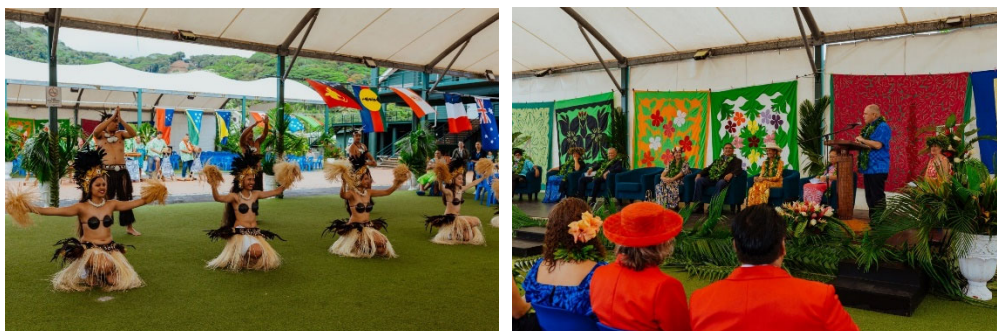


図 2 (左) : セレモニーでのパフォーマンス

図 3 (右) : セレモニーの様子 (登壇者がマーク・ブラウン首相、左から3番目がヘンリー・プナ PIF 事務総長) (共に The 5th PIURN Conference Official Photo Gallery より)

セレモニーでは、聖歌隊による歌、ポリネシアンダンスのパフォーマンス、ポリネシアンドラムの演奏などが披露され、それに続いてクック諸島でのアートプロジェクト「Te Mana o Te Vaka³」の紹介があった。このプロジェクトは、クック諸島を代表するアーティストである Michael Tavioni 氏によって 2022 年に立ち上げられたもので、その目的はカヌー (Vaka) 文化を通じてポリネシアの伝統的なライフスキルを復興し、称えることである (Cook Islands Voyaging Society)。第5回会議では、Tavioni 氏によってプロジェクト活動及び、ポリネシア文化の中心を成すカヌーの重要性について紹介

³ 「カヌー (Vaka) の力、名声、そして権威」を意味する。詳細は Cook Islands Voyaging Society, *Te Mana O te Vaka* (<https://www.cookislandsvoynaging.org/temanaotevaka/>)を参照

された。セレモニーの様子は、クック諸島のローカルテレビ Cook Islands Television News (CITN) でも取り上げられた。

2-2. 個別発表および特別セッションについて

上述したように、第5回会議のメインテーマは「Exploring this Sea of Islands」であり、これは太平洋諸島地域を代表する文化人類学者であるエペリ・ハウオファ (Eveli Hau'ofa) 博士による『We are the Ocean』に書かれている一節から、「海」をキーワードとして幅広い学問分野の研究を受け入れ、学際的な会議になるようにと設定されたものである (The 5th PIURN Conference)。

実際に、第5回会議は極めて多彩かつ寛容な会議であった。個別および特別報告では、気候変動、歴史、公衆衛生及び医療、言語、教育、芸術、海洋、経済、政治および外交、ジェンダー、メンタルヘルスなど、幅広い分野のテーマを扱った36セッションが行われた。筆者は、「Political Issues in Oceania (オセアニアにおける政治課題)」というセッションにおいて、「Role of the Quad in the context of human security: Can the Quad become a good neighbor of the Blue Pacific?」というタイトルでの個別報告を行った。セッション数が多く、同時並行で興味深い発表が次々に行われるために、参加者たちは会場中を走り回る状況であったが、バラエティーに富んだ研究発表はどれも興味深く、様々な手法や見解を通じて太平洋諸島地域を見つめることができた。



図 4 (左) : 個別セッションの様子



図 5 (右) : 全体セッションの様子 (共に The 5th PIURN Conference Official Photo Gallery より)

他にも、初日に PIURN 設立 10 周年を記念した全体セッションが執り行われた。テーマを「Empowering Pacific Islands' Universities (太平洋諸島地域の大学に力を与える—南太平洋地域のアセットとしての PIURN)」として、パネルディスカッションが行わ

れた。パル・アルワリア (Pal Ahluwalia) 南太平洋大学学長が司会、ヘンリー・プナ PIF 事務総長などがパネリストを務め、太平洋諸島地域における大学の現状と課題、地域内での教育及び研究分野での協力の可能性、さらに特に僻地にいる学生たちへの支援方法（奨学金含む）や若手研究者たちのキャリアなどについて意見交換がなされた。

2-3. 会議こぼれ話

第5回会議への参加については、研究発表以外の部分で悩まされることが多々あった。まずはドレスコードである。オープニングセレモニーのドレスコードは、「National Dress」、最終日のレセプションのドレスコードは「Island Formal」である。これは一体どういうことなのか。仕方なく、会議の受付カウンターで「Island Formal」とは何なのかを尋ねたところ、スタッフの方に「これを買って帰りなさい」と言われ、Ei katu を、有無を言わず購入させられた。Ei katu とは、ポリネシア地域で着用される花冠のことで、ポリネシアの正装でもある。この時に購入した Ei katu はレセプションだけでなく、研究発表の際にも着用した。



図 6 : PIURN のレセプション (Island Formal 着用・右が筆者)

さらに会議最終日には、ポリネシア文化を体験する様々なアクティビティがプログラムに含まれており、カヌー体験、サイクリング、ハイキング、パレオ染物体験、サファリ（探検）ツアー、ダンスなどのコースがオプションで選べた。なかでも、ポリネシアの伝統的手法を学べるカヌー体験は大人気で、あっという間に満席となった。筆者は、最も手軽そうに思えたダンスを選択した。アクティビティの時間、ラロトンガにある体育館で地元の女性たちのダンスクラブの指導の下、1時間のダンスレッスンが始まった。意外にも激しいクラブミュージックとドラムに合わせ、ハイビートのポリネシアンダンスを踊りまくるといふ衝撃的な内容で、ちょっとでも休憩していると、地元の方々に「踊って！」と促された。ポリネシアンダンスの経験がない筆者は、

足がガクガクになりながら、ぎりぎりの状態で踊りきったのだった。この時筆者は、「オセアニア地域研究を続けるには、体力が必要」ということを心の底から悟った。

3. ラロトンガで「マタリキ (Matariki)」を祝う

会期中である 2023 年 7 月 6 日の未明から早朝にかけて、ニュージーランド高等弁務団主催の「マタリキ (Matariki)」を祝うパブリック・イベントに出席した。マタリキとは、冬至の後に東の空に輝く星団のことで、英語ではプレアデイス星団、日本語では昴(すばる)として知られる。マオリのなかでは、それが夜空に現れた日が新年とされる⁴。マタリキの日に人々は集い、現在(いま)に感謝をささげ、故人を偲び、新年の抱負を立てる。マオリにとってマタリキは重要な意味を持つ日であるが、マタリキがニュージーランドで公式に祝われるようになったのはごく最近になってからのことである。2022 年 4 月にジャシンダ・アーダーン元首相によってマタリキを祝日とする法が制定され、同年 6 月 24 日がニュージーランドにとって初めてのマタリキの祝日となった (New Zealand Government)。

マオリのルーツのある国々でマタリキは祝われるため、クック諸島においてもマタリキが公式に祝われていた。7 月 6 日未明、筆者は PIURN 第 5 回会議に出席している参加者のために用意されたバスで、会場となったラロトンガ島にある Te Uki Ou 小学校に向かった。イベントでは、マオリの天体物理学者であるポーリーン・ハリス博士によるマタリキについての講義を受け、その後集った人々と共に空を眺めた。空が明るくなりはじめたとき、新年の訪れを祝うための食事がふるまわれ、地元のこどもたちがドラムの演奏を始めた。夜が明けてゆくにつれ、人々の祝いの声や音楽も、だんだんと明るく響いていった。公式に祝日となって 2 度目の「マタリキ」を、ラロトンガで祝えたことは、本当に貴重な経験であった。

⁴ 毎年 5 月下旬から 7 月上旬までの間であるが、地理的条件によって時期が毎年変動し、その捉え方も部族ごとの決まりによって異なる。2023 年は、ニュージーランドにおいては 7 月 14 日がマタリキであった。



図 7 (左) : クック諸島でのマタリキの夜明け

図 8 (右) : マタリキを祝うドラムを演奏したこどもたち (共に筆者撮影)

4. むすびにかえて PIURN から考える、オセアニア地域研究の将来

第 5 回会議においては、その端々にて、太平洋諸島地域の社会や人々の豊かさを感じることができた。また多様かつ多彩なこの会議にて、多方面からオセアニアという地域を見つめ、考えることができた。高等教育や研究という側面からは、太平洋諸島地域はその地理的な特徴によって多くの課題があり、また教育へのアクセスが十分でない人々も存在する。そのような中で、「海」というキーワードで人々と研究を結び、今後のあるべき姿について議論する PIURN という組織と会議の存在意義は大きい。今後はこの地域に関する研究の発展だけではなく、グローバル社会の中での太平洋諸島地域の存在感を示していくためにも、より一層重要なものになっていくのではないかと。

<参考文献>

Cook Islands Voyaging Society,

Te Mana O te Vaka

(<https://www.cookislandsvoaging.org/temanaotevaka/>)(Accessed on 5 February 2024)

New Zealand Government, Ministry of Business, Innovation and Employment.

New Zealand celebrates first matariki public holiday. Employment New Zealand.

(<https://www.employment.govt.nz/about/news-and-updates/new-zealand-celebrates-first-matariki-public-holiday/>) (Accessed on 5 February 2024)

Pacific Islands Universities Regional Network (PIURN),

(<https://piurn.org/>)(Accessed on 5 February 2024)

The 5th PIURN Conference 2023,

(<https://piurn2023.sciencesconf.org/>) (Accessed on 5 February 2024)